

中国支部若手交流サロン（討論会）報告

2014年5月31日に松江工業高等専門学校で開催された第66回中国支部研究発表大会(13:00~14:30, 図書館棟大講義室)において、標記の交流サロンを実施した。このサロンは、土木学会100周年事業の一環として企画された行事であり、「次世代の土木技術者が描く未来社会と“私の貢献”」と題して、若手技術者によるパネルディスカッションとした。実施の狙いは、「成熟化社会を迎えた日本では、社会基盤をめぐる価値観の多様化を踏まえた、新たな価値を創造できる未来社会の提案・構築が急がれる。本サロンでは、中国地方の若手土木技術者が、それぞれ思い描く未来社会とその実現プラン、および各人の貢献を語ることによって、新しい土木技術者像を描くことを目的とする」と設定した。討論のパネリストは各県代表1名の計5名であり、コーディネーターとして松江国道事務所長の新田恭士氏を迎えた。

冒頭、各パネリストからそれぞれが想定する未来社会像とその課題や期待が発表され、これに基づいて質疑が行われた。主な発表内容は、以下のとおりであった。氏原岳人氏（岡山大学）は、地域社会・地球環境・インフラ・土地建物などを俯瞰しながら、国の活力を増すような施策をとる上で、土木技術の重要性を訴えた。石田勇介氏（鳥取大学博士課程）は、局所的な地震動予測技術の開発と活用に関して発表を行った。賀谷剛志氏（広島県）は、社会基盤インフラが愛着を持って住民に受け入れられる社会の構築を訴えた。大木協氏（中村建設/山口）は、自社と自らが関わって開発された水質浄化技術を中心とした、魅力的なまちづくりを訴えた。古川のり子氏（バイタルリード/島根）は、地域のソーシャルキャピタルを支える土木技術や、社会基盤の重要性を訴えた（参加者数：83/配布資料部数より）

○ パネリストの皆さんの発言要旨/発言者が無い項目は上に同じ。

- ・（岡山：学/氏原）各地域が抱えている課題は多様であり、それぞれの地域ごとに異なる課題に取り組みなくてはならない。しかし、現状の閉塞感を打破するような対策が必要。
- ・（鳥取：学/石田）局所的な地震動の予測技術などの意義を市民に伝えるアウトリーチ活動が重要。
- ・たとえば、水没地点内にある避難場所については、その危険性を議論する活動も重要。
- ・地域が抱えている潜在的な危険性を、市民が理解して地域の居住などを選択するようになればよい。
- ・（広島：官/賀谷）今後は、さらに産官学連携を推進することがよいと思う。
- ・具体的には、橋梁をはじめとするインフラの補修技術、劣化予測に関して技術向上を現場と一体になって進められる体制作り、さらに補修計画を立案するためのアセットマネジメント。
- ・地方公務員が技術者として研鑽を積むことができる状況が乏しい。日常的な事務の多さによって、技術力を向上させるような機会を持ちにくくなっている。
- ・技術の必要性を、財政当局や市民社会に向かって訴えていく発信活動が重要では？
- ・（司会：官/新田）地方自治体は、官学の連携が不足しているのではないか？
- ・（岡山：学/氏原）都市計画や地域計画では、比較的連携が進んでいるように思う。分野によるのでは？
- ・（山口：民/大木）たとえば水質浄化など、民間にある多様な技術を横並びで比較して、それぞれの利害得失を横並びで評価する認証制度などを土木学会が作る方策は考えられないか？技術の当否を土木

学会から第三者的かつ公平に評価してもらえると、学会による民間技術開発支援につながると思う。

- ・分野によると思うが、水質浄化に関わる技術開発に関して、産学連携はできていると思う。学会や様々な勉強会にも顔を出しているの。
- ・(司会：官／新田) 日本人が幸福を実感できる／今後目指すべき社会は？
- ・(島根：民／古川) 今後我々が目指すべき社会は、人と人がつながる社会ではないか？
- ・多くの地域づくりにおいて、目指すべき目標が共有できない場合がある。たとえば、社会基盤づくりに携わる人と、それを使う人の間で、視点や立場が共有できないことがある。
- ・たとえ最終的に目指すべきことが共有できなくても、多様な主体が集まることで新たな価値が創造される場合もある。
- ・地域づくりで合意形成を行う場合、議論を重ねることやと話すことそのものにも楽しみや幸せがある。
- ・交通や産業などの条件が不利であっても、それを逆手に取って「がんばろう」と思えるような地域活性化のアイデアを提案していくことが重要。

○ 壇上での一連の討議のあとで、フロアから以下の意見が寄せられた。

- ・土木は「幸福になるための価値を創造する」よりも、防災や環境など、「不幸を回避する」という意味で価値の保護が技術の中心ではないか？
- ・「当たり前」の日常を継続していくことと、我々の技術を社会との対話を通じて残していくことが重要ではないか？
- ・防災面で、人間活動が不適切な地区の土地利用を、もっと積極的に制限するべきではないか？

○ 最後に、各パネリストから、それぞれの未来社会への貢献について発表された。

- ・(島根：民／古川) 出雲大社・神門通りというインフラのリノベーションを通じた、土木技術の発信。
- ・(山口：民／大木) 自社の持つ水質改善技術を適用した、新しい親水空間を有する都市の創造。
- ・(広島：官／賀谷) 田中賞を受賞した第二音頭大橋架橋事業のような、産官学の技術開発・協力の推進。
- ・(鳥取：学／石田) 面的な地震リスクに関する情報発信と、地域にあった「自助・共助・公助」の形成。
- ・(岡山：学／氏原) 「国民生活を守り支える”開けた”土木」を中心とする積極的な市民社会への発信。

○ 担当者の感想

非常に困難な課題を設定したにも関わらず、パネリストの皆さんは、土木技術と市民社会の接点を懸命に模索されている様子をお伝えいただいた。技術を社会に送り出すまでの研究開発に真摯に取り組む姿勢を見せられた石田・大木氏、都市・交通計画の中で学問的・実務的な社会との接点に「楽しさ」や「面白さ」を加味した計画の重要性を訴えられた氏原・古川氏、さらに官の立場から自らの技術研鑽と産官学連携を模索される賀谷氏のいずれのご発表も、感銘深い内容であった。個人的には、パネリストの皆さんは一樣に、土木技術によって実現する社会だけに着目するのではなく、そのプロセスを丁寧に／楽しみながら／構築・発信することの大事さを伝えられたように感じた。

文責・塚井誠人（中国支部 100 周年事業担当：広島大学工学研究院准教授／地域計画）